

新型コロナ

県内441人

石巻・大川 描いた映画

妹を亡くした女性が製作



地球

妹を亡くした女性が作った石巻・大川地区を見つめた2本の映画〈宮城〉



仙台放送

2022年3月25日 金曜 午後7:55

11年前、宮城県石巻市の大川小学校を襲った津波で妹を亡くした女性が自主制作した映画の上映会が仙台市内で開かれました。監督の女性は、作品を作り終えたことが人生の転機になったと話しました。

この上映会は、仙台市青葉区のせんだいメディアテークで催されました。映画を制作したのは石巻市出身の佐藤そのみさん（25）です。佐藤さんは中学2年生だった11年前、石巻市の大川小学校を襲った津波で妹のみずほさんを亡くしました。

佐藤そのみさん（2011年10月）

「みずほとしかできないこと、みずほとしか話せないことだらけだった。今、そういう存在がないので」

震災のこと、地元のことを映画にしたい。佐藤さんは大学で映画作りを学びました。そして在学中に2つの映画を作りました。

一本目は劇映画「春をかさねて」。主人公は震災で妹を亡くした中学生。同級生や、ボランティア、家にやってくる取材記者達と接し、心が揺れ動く様子が描写されています。

佐藤そのみさん

「2本目は1本目の「春をかさねて」で表現しきれなかったことがたくさんあったので、卒業制作でドキュメンタリーで、また大川のことを撮ろうと思って撮りました」

2本目の映画、「あなたの腫に話せたら」。佐藤さんを始め、友人やきょうだいを亡くした大川の若者達が大事な人に語り掛けるドキュメンタリーです。

「千聖へ。お姉ちゃんの今の暮らしを見てどう思う？楽しそう？心配？あの時の私は千聖が世界の全てで、いつも一緒にいる、どんなに学校で1人ぼっちでも千聖がいるって思っていたのに、ぼって一瞬で私1人にされてさ、神様をものすごくうらんでいるよ。何で連れてったの？なんで会えないの？いつもみたいにお姉ちゃんって走って抱き着いて来てよ。まだ私の中にいる、あの頃の自分は毎日思っているよ」

上映後のトークショーで佐藤さんは映画を撮り終えてから少しずつ、震災や家族、自分に対する考え方が変わってきたと話しました。

佐藤そのみさん

「映画を作り終えてから震災について考えることがほとんどなくなりました。妹について考えることもほとんどなくなりました。それはちょっとどうなのかなと思うんですけど、地元の人や家族がずっと幸せであってほしい。今はただそれだけ思っています。あとは自分の人生がこれからいい方向に進むように努力していこうと、この作品を作り終えてから、やっと思えるようになりました」

来場者

「セリフがすごく少ない映画だと思うが、それがかえってものすごく伝わった。余韻が今すごく残ってますね」

佐藤さんの高校時代の友人

「当時の友人の思いや状況がこの映画を通じてすごく伝わって来た。私自身も当時の震災のことを思い出して良かったと思います」

来場者

「監督が最後にこの映画を撮り終えて、妹のことよりも家族の幸せや自分のことを考えられるようになったと話していたのが印象に残りました」

映画を作り終えて3年。東京で会社員として働く佐藤さんは、目の前の仕事も頑張りたいと話し